

ゆめ工房

Vol. 29

「消える職業」から考える

◇ 新学習指導要領が告示される前に出された「論点整理」の中で紹介された論文が話題になっています。それは、オックスフォード大学准教授マイケル・オズボーン氏が出したもので、「今後10年～20年程度で、AI(人工知能)の発達によって、半数近くの仕事がコンピュータによって自動化される可能性が高い」という予測です(右の表参照)。その確率は90%以上というのですから、驚くべき数字です。

◇ 新学習指導要領は、このような社会の状況から考えて、2030年の社会と、そして更にその先の豊かな未来を築くために、教育課程を通じて初等中等教育が果たすべき役割を示すことを前提としてつくられています。そこで、新学習指導要領では、「何を知っているか」から「知っていることを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」という方向に転換することが求められ、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力や人間性など情意・態度等に関わるもののすべてを、いかに総合的に育てていくかということを目指すことになりました。

◇ 新学習指導要領告示に合わせて、教育の現場である学校でもいろいろと新しいことが始まっています。道徳の教科化、外国語活動の充実、キャリア教育、プログラミング教育…。それら一つ一つを大切にしなければならないことは分かるのですが、そのような形を整えることだけに邁進するのはいかにがなものかと危惧しています。私たちが本当にやらなければいけないことは、新学習指導要領が求めている“教育観の転換”ではないかと思うのです。

私たちがやらなければならないことは、子どもたちに「社会で生きて働く知識や力を育むため」に、「何を学ぶか」という学習内容の在り方に加えて、それらの内容を「どのように学ぶか」という、学びの過程に着目してその質を高めていくことが重要なのではないかと考えている次第です。となると、どういうことが大切になるのでしょうか。一言で言うと「自分で考えて行動できる」ようにすることではないかと思っています。

ここで、最初に述べた「AI(人工知能)の発達」に話を戻します。AIが発達して私たちの職業が奪われるということは、私たち人間に代わってAIが仕事をするとい

主な「消える職業」 「なくなる仕事」	
銀行の融資担当者	
スポーツの審判	
不動産ブローカー	
レストランの案内係	
保険の審査担当者	
動物のブリーダー	
電話オペレーター	
給与・福利厚生担当者	
レジ係	
娯楽施設の案内係、チケットもぎり係	
カジノのディーラー	
ネイリスト	
クレジットカード申込者の承認・調査を行う作業員	
集金人	
パラリーガル、弁護士助手	
ホテルの受付係	
電話販売員	
仕立屋(手縫い)	
時計修理工	
税務申告書代行者	
図書館員の補助員	
データ入力作業員	
彫刻師	
苦情の処理・調査担当者	
簿記、会計、監査の事務員	
検査、分類、見本採取、測定を行う作業員	
映写技師	
カメラ、撮影機器の修理工	
金融機関のクレジットアナリスト	
メガネ、コンタクトレンズの技術者	
殺虫剤の混合、散布の技術者	
義歯制作技術者	
測量技術者、地図作製技術者	
造園・用地管理の作業員	
建設機器のオペレーター	
訪問販売員、路上新聞売り、露店商人	
塗装工、壁紙張り職人	

(註)オズボーン氏の論文「雇用の未来」の中で、コンピュータに代わられる確率の高い仕事として挙げられたものを記載

うことになります。2030年は、A I が今以上に仕事をする時代になるということです。A I（コンピュータ）の特徴を考えてみます。

- ・プログラムに決められた手順をきちんとこなす
- ・疲れることなく、無限に反復作業ができる（それが意味のないことでも…）
- ・命令以上のことはしない
- ・感情に左右されることがない

等々の特徴が考えられます。ここで勝負しても、人間に勝ち目はありません。その視点で、私たちがやっている教育を振り返ってみます。

*子どもに何かをやらせるのに、その意味を伝えることなくやらせてはいないか。

*そのことによって、意味がわからないでやることに違和感をもたない子どもを育てていないか。

◇ 算数での、図形の面積の公式が一番わかりやすい例です。例えば、学習塾に通っている子どもは、学校で習う前から図形の面積の公式を使って、面積を求められることがあります。また、学校で公式を習ったから、とにかく「できる」と思っている子どもがいます。しかし、テストで正解しても、その公式の意味がわかっているのかというと、これは怪しいものです。公式を覚えて正解が出せることと、意味がわかっていることは、全く別物です。公式や解法をとにかく丸暗記させて解かせることは、A I のプログラムと同じだと思いませんか。ひょっとして、私たちは知らず知らずのうちに、子どもたちをA I 化させてしまっているかもしれません。

◇ 先に述べた「自分で考えて行動する力」を育てるのに、もっとも適しているのは「特別活動」です。自分たちで話し合っ、自分たちの学級や学校の課題を解決する方法を考えることをもっと大事にしていきたいものです。

とはいいいながら、学級活動の時間が「教科でできないことをやる時間」となっているという声や、「働き方改革」の名の下に、学校行事の精選に火が付いたという話をよく聞きます。「自分で考えて行動する力」は、特別活動で育てることができると今一度考え、安易な精選や学級活動の意味のない使い方に「待った！」をかけられるようにしたいものです。

文責 スギタ